

第2回 奄美群島成長戦略プロジェクト推進会議
議事録

- 日 時：令和3年3月5日（金） 10:00～11:30
- 会議方式：Web会議（主な会場：国土交通省、奄美自治会館）

会議次第

1. 開会
2. 議事
①「自然保護と観光の両立」の調査結果等について
②課題等に対する対応策の提案について
③今年度の奄美群島振興交付金の特定重点配分について
3. その他
4. 閉会
【配布資料】
資料1：奄美群島成長戦略プロジェクト推進会議出席者名簿
資料2：「自然保護と観光の両立」に関する調査結果
資料3：課題等に対する対応策の提案
資料4：令和2年度 特定重点配分事業一覧
資料5：今年度の調査結果（R3.3.5時点）

【委員名簿】

（敬称略、順不同）

氏名	所属及び役職	備考
海津 ゆりえ	文教大学 国際観光学科教授	欠席
勝 眞一郎	サイバー大学 IT 総合学部教授 奄美市産業創出プロデューサー	奄美自治会館
曾根 進	株式会社 JTB 法人事業本部 企画開発プロデュースセンター 地域交流事業推進チーム 課長	リモート参加
服部 正策	元 国立大学法人東京大学 医科学研究所 特任研究員	リモート参加
原口 泉	志學館大学 人間関係学部教授	リモート参加
本田 勝規	（独）奄美群島振興開発基金 理事長	奄美自治会館

【事務局及び関係者】

氏名	所属及び役職	備考
中原 淳	国土交通省国土政策局長	国土交通省
田邊 靖男	国土交通省国土政策局 大臣官房審議官	国土交通省
笹原 顕雄	国土交通省国土政策局 特別地域振興官	国土交通省
村上 隼	国土交通省国土政策局 特別地域振興官付企画調整官	国土交通省
田中 元幸	国土交通省国土政策局 特別地域振興官付調整官	国土交通省
徳田 達彦	国土交通省国土政策局 特別地域振興官付課長補佐	国土交通省
宇田 賢司	国土交通省国土政策局 特別地域振興官付行政研修員	国土交通省
田中 完	鹿児島県 大島支庁長	奄美自治会館
吉松 康雄	鹿児島県企画部次長	リモート参加
大西 千代子	鹿児島県企画部 離島振興課長	リモート参加
大吉 忠信	鹿児島県企画部 離島振興課 奄美振興係長	リモート参加
小浜 博樹	鹿児島県企画部離島振興課 主査	リモート参加
泰良 淳	鹿児島県企画部離島振興課 主事	リモート参加
信島 賢誌	奄美群島広域事務組合 事務局長	奄美自治会館
畑 健一郎	奄美群島広域事務組合 奄美振興課長	奄美自治会館
米田 俊也	奄美群島広域事務組合 奄美振興課係長	奄美自治会館
美里 洋秋	奄美群島広域事務組合 奄美振興課係長	リモート参加
白石 重樹	奄美群島広域事務組合 奄美振興課係長	奄美自治会館
深沢 久和	(株)プレック研究所 環境計画2部 次長	リモート参加
藤田 聖二	株式会社九州経済研究所 企画戦略部長	奄美自治会館
松尾 大悟	株式会社九州経済研究所 企画戦略部 研究主査	奄美自治会館
大迫 彩紀	株式会社九州経済研究所 企画戦略部 研究員	奄美自治会館

1. 開会

○事務局 国土交通省 中原国土政策局長より挨拶

2. 議事

①「自然保護と観光の両立」の調査結果等について

○事務局 奄美群島広域事務組合 信島事務局長より説明

○事務局 株式会社プレック研究所 深沢環境計画2部次長より説明

○原口委員

県立奄美図書館ではボランティアでやっけていただいているが、あまみならでは学舎という人気の講座がある。これをどうか発信してほしいというのを受けて、昨日、県立図書館の運営協議会があって、奄美からも館長に来ていただいた。公立の図書館では、公立図書館協議会があり、会議は全部WEBとなっている。ところが奄美の県立図書館だけがなく、これからは新しい年度予算がついたので、なるべく県立奄美図書館から奄美の情報発信をするようにする。それをやらなきゃいけないと思ったので、ご報告した。

もう1つは、コロナの中でオンライン化が進むと子供の学ぶ姿勢が低下しているのではないかという声が奄美からも聞かれた。子供や家族で学ぶということがより大切だ、ということで今のご報告のすごく良かったのは、少人数の学びの機会が、奄美でどんどん催されればいいなと思った。家族旅行というのをターゲットに大きく掲げればいいのではないか。家族で楽しかった思い出は一生の思い出として残るはずである。

それともう1つは、大学生のゼミ旅行や高校生の活動を積極的に教育のプログラムとして取り入れるという方向が見えているので、大変いいご報告だったと考えている。

○本田委員

前回の合同WGの中で、デジタルファーストというのがWGの委員の先生の中から非常に出たと思うが、観光のルール作りをして、事前に周知するという視点は、今の報告のまとめの中で、どこかに出てきているか。資料の中に見当たらなかったのが質問です。

○事務局 株式会社プレック研究所 深沢環境計画2部次長より説明

前回のWGで、デジタルを活用して例えば繁閑の利用差を平準化するような取組などができるのではないかというご提案をいただいていた。今回の資料については、この後の議題とダブる部分を割愛させていただいた関係で載っていないが、実際取組としては、例えばナイトツアーの三太郎線の利用調整の取組やWEBで皆さんが見られるような形で混雑を緩和するような取組などを今検討しているので、そういったところは、自然保護と観光の両立に非常に重要な取組だと認識している。

○勝委員

今回のコロナ禍の中で、オンライン学習がかなり進んできて、利用の仕方としては事前にある程度の知識のレベルを揃えるために、例えば、来る前に奄美の生態系の基礎編みたいなものを見ていただいて、尚且つそれを見た上で、現地でガイドの話聞いてみたり、現物を見たりすると、より質の高い体験が出来る。大学でもレベル合わせのためにオンライン学習を使って事前学習をしている、ということもかなり行われるようになったので、ぜひ、あまみならではの学舎でのコンテンツも事前にアーカイブしていただいて、後で見られるとか、自然のコンテンツもガイドが案内しやすいように、レベルを揃えるために、デジタルアーカイブを使うことも一つの手だと思う。

○服部委員

ヒアリングを受けてこういう風にまとめていただいた。実はひと月に1回ずつ奄美に行っており、2月にも行ってガイドさん達と勉強会を2日間やってきた。3月にも奄美大島と徳之島に行こうと思っているが、行ってみると、お客様が確かに減っていて、ほとんど休業状態だというガイドさんも多いが、皆さん本当に良く勉強されている。ガイドだけで生活しているのではないということもあって、マスコミ対応や取材、映像提供とか色々なことで頑張りながら、皆さん勉強もされている。前回も言ったが、コロナでうまく動いていない部分を補うような形でスキルアップは進んでいる。

「事前に情報を」といった意見もあるが、なかなか事前に出した情報で、奄美の自然で今度はこんなものを見せてもらいたいという、そういう希望を持ってきているお客さんよりも、何を見せてくれるのかなという気持ちで皆さん来ているから、そこはガイドさんの腕の見せ所であり、それがリピーターの獲得に繋がって、2回目、3回目のお客様を作っていくという風に考えているガイドさんというのが、僕らは見ていて一番安心感が持てるというのが現状だった。

デジタルでの色々なものを、今出せることは出せるが、実物にはどうしても勝てないので、その部分がガイドさんの能力が試される場所だと痛感した。特に少人数でのお客さんが多いので、1~3名ぐらいのお客さん相手にどれだけ楽しんでもらえるかという点では、奄美って本当に凄い。私は今、島根県にいるが、島根は奄美に比べると滅茶苦茶不便である。コンパクトではない。奄美ではあの島に1個ずつあるものが、島根県全県で一カ所にしかない、県庁所在地にしかないという不便さが色々ある。自然もそうで、本当に奄美というのはコンパクトにまとまっていて凄く便利だし、珍しい動植物も日々、普通にその辺にいる。そういうところでガイドができていて、本土から奄美に行くと本当にいいところだと思うので、これはそういう意味での情報発信がある気がしている。

○原口委員

今日の南日本新聞にも載っていたと思うが、奄美の文化財で、長年の懸案であったのが大島紬の製作技術である。これは無形文化財である。作品を見ていいなと鑑賞するのは

なく、今度鹿児島県の文化財保護審議会では、奄美大島紬の製作技術の伝承・技術に関して文化財指定を目指している。奄美の大島紬伝統製作技術保存団体が組織化されるという動きがある中で、作品を見るのではなく、作る過程を見るというのも、服部委員がおっしゃったように、とても他では味わえない醍醐味なので、そういうメニューもどんどん増やしていけばいいのではないかと思う。ぜひ、無形文化財指定に向けて努力したい。

○曾根委員

資料2の33ページ、自然保護と観光の両立に関する主な課題が、その他も入れて6点あるが、1つ目の新型コロナ関係の情報発信というところで、ハワイの政府観光局でHP上にコロナの情報などデジタルの情報が常にある。入口をどこの来島客が見るか、どこが1番多いか、アクセスするか調べてからになると思うが、そういったコロナの状況、医療を含めた状況を積極的に発信するのがいいと思っていた。

ガイド育成について、先程デジタルの話もあったが、コロナになったからエコツアーリズムがフォーカスされるとなった時に、先日のWGでもあったデジタル化、デジタルファーストをエコツアーガイドの中でも取り入れていく。例えばタブレットやペーパーレスなどの取組をその中にも細かく入れていく。生のガイドでなければ伝わらないことがあるが、人材が足りない時に代替できるような取組を新たに作っていった方がいいと思う。

○原口委員

認定ガイドの社会的認識を高めてほしい。財源の問題もコメントされていたが、やはり認定ガイドは社会的に高い地位として、経済的にもやっていけるような施策を取るべきだと思う。認定ガイドは絶対必要である。

○勝委員

ガイドの給与というかサラリーはどれくらい取れるのか。今、兼業・副業されている人が多いが、若い人達をガイドに育成していこうという時に、やはり給与面というのは気になる。親御さんたちがガイドになったら大変だよというのではなく、ガイドにぜひなるべきだよというようになるようなモデル、支援が出来るといい。

スポーツについて、移動するときによく見かけたが、陸上競技の方が結構来ていた。奄美はコロナが今発生していないコロナフリーの島であるという状況判断と、選手がPCR検査をして、2週間体調管理をした上で来ているので、コロナフリーの方々が、コロナフリーの島に来て、安全な環境で、都会で合宿するのは大変なので来ている。沖縄本島だと今ちょっと心配かなということもあるので、そういう面で奄美が選ばれている。そういう情報が我々はまだ発信出来ていない。沖縄のように、宿は医療体制とどう連携しているか、今はコロナフリーで選手にこういう競技場でこういう受入ができる、というアピールはもう少し準備しないと難しいと思うが、かなりなニーズがある分野と思っている。

○田中完大島支庁長

資料2の33ページの課題が挙がる中で、②の語り部の後継者の育成や地元の年配の古老の活躍の場の提供と書いてあるが、非常に大事と思う。その地域の1番の原点を知っている方がずっと伝えていくのは大事と思う一方で、ちょっと田舎の方に行くと、年配の方がコロナの関係で接触することを非常に警戒されている。活躍してほしいが、年配の方は特に警戒する。そんな中で、ON THE TRIPが、地元のシニアに丁寧から色々な話を収集して、それをスマホで見られて案内できる。そういうのはwith コロナの中で、シニアのことも考えたフォロー、それをアーカイブで取りながら発信するという意味では素晴らしい。出来れば奄美の色々な地域で広がればいいと思う。

もう1点は、資料2の33ページ①の群島全体が連携した受入プログラムの造成について、やはりそれぞれに地域の個性があり多様である。最近 Peach などがフェリーと飛行機をセットにしたプログラムツアーを作って、複数の島を周遊させる取組が出てきている。ぜひ世界自然遺産登録を機に、奄美大島・徳之島だけでなく、喜界や沖永良部、与論も含めて、多様な島を感じて、体験してほしい。

○勝委員

コロナで出来ないことと、出来ることがある。例えば、屋外で音声を聞きながらや、ガイドもソーシャルディスタンスを取って、マイクで案内するのは、リスクゼロとは言わないが、かなりリスクが低いので出来ることだが、それを全部一斉に NO と言うと難しいので、ステージ分けというか、この状況だとこういうことは出来ますよと、これはまだ危険なので、密で会食することはやめましょうなど分けがあってもいいと思う。

②課題等に対する対応策について

○事務局 株式会社九州経済研究所 藤田企画戦略部長より説明

③今年度の奄美群島振興交付金の特定重点配分について

○事務局 国土交通省 徳田国土政策局特別地域振興官付課長補佐より説明
奄美群島におけるメインビジュアルについても言及・補足説明

○本田委員

対応策の提案ということで、非常に魅力的な提案をしていただいたが、これをどうプロジェクトとして推進していくのか、誰がどういう形でやっていくのか。特定重点配分についての説明も一緒であったということは、令和3年度の特定重点配分に入れていけるということなのか。時間的に間に合っていない気もしているが、そこを聞かせてほしい。

○事務局 国土交通省笹原振興官

対応策の提案というのは、ほぼこれまでWGとかで議論が出たものを取りまとめたも

のと考えている。これ自体はコロナの中でロードマップを見直すにあたりどうしたらいいかについての提案と受け止めている。今のロードマップの中にも今後 5 年間に向けた提言を議論していただき、提言は提言とし、その中であと広域事務組合や県、国土交通省で応援できるところは応援したり、モデルとしてやったりはできる。主体的に取り組むのはやはり地元が多くなると思うが、主体は誰かはっきり決まっているものはまだないかもしれない。これからそれを含めて検討し、民間の力を借りて、民間で実現するなど、色々なやり方があると思う。いずれはロードマップの中に落とし込んでいけるものになるのではないか、という位置づけである。

○勝委員

この提案書は、誰から誰に出しているか。この推進会議から、国土交通省や地元自治体に対して出しているというスキームでいいのか。

○事務局 国土交通省笹原振興官

はい。

○勝委員

承知した。

○本田委員

第 1 回でサテライトキャンパスの話があった。奄美大島で共同キャンパスを検討しているところで、大学生をどうするかがこの提案で出てきていない。ぜひそこは、どういう位置付けで入れるかは検討がいるかもしれないが、人材育成だけなのか、大学生がいっぱい入ってくるということ自体がある意味観光的な側面があるのではないかなど、色々あると思う。是非入れていただきたい。それに関連して、文部科学省が大学等連携推進法人を新たに作る。詳しく理解してないが、地方の公共大学との連携というのがあったので、もし活用出来るのであれば、活用しながら、奄美での共同キャンパス的な動きが出来ないのかという視点も入れてほしい。

○事務局 国土交通省

これで取りまとめているが、そういった足りないところや漏れているところ、新しいことがあるなどを提案してほしいと思う。ただ、人手もお金も色々あるので、提案していただいた中で、選んでいただく。先程の大学の制度については不勉強で、また勉強する。

○曾根委員

大学のサテライトキャンパスや交流人口・関係人口を増やしていくこと、廃校等の活用などについて、例えばコワーキングスペースと共同にすることで官民連携を促進すると

か、政策官民連携とか複雑にはなるので、そこの分野はなかなか行きづらい。あえて入れるとするならば、関係人口や中高生の探求学習と情報発信は大学生も担ってもいいと思う。今、高大接続とか高大連携で世の中は動いているので。高校生だけでなく、高校生に大学生が指導していく構図がまたエンゲージメントの構築に繋がると思うので、(3) (課題4の(3))に入れてもいいと思う。

○勝委員

中高生の探求学習と情報発信について、私は今、県立大島北高の魅力化コーディネーターをやっており、総合的探求の時間という科目が出来ている。その中で、どういったことを探求するかというと、1グループは観光についてしているが、中学校でも調べ学習、高校でも総合的探求の時間があり、大学でもプロジェクトベースラーニング (PBL) というのをやり始めている。どれも同じようなテーマで、なかなか指導がうまくいかないと、似たようなことを中学生から大学生までやっていて、調べた結果、大島紬の後継者が少ないので、何とかしないといけない、みたいなところで、毎回、中学校も高校も大学も終わっている。それをちゃんと高校生、大学生とレベルアップが出来るような、地元側の推進体制もいると思う。

「地域みらい留学」で受入校を増やしたい、ということで古仁屋高校に新しい寮ができたが、北高もぜひ寮を作ってほしい。お金がなかなか無いが、寮を作るとこういった受入が出来るなど、校長先生と話している。

○曾根委員

私は、企業版ふるさと納税や、観光の探求学習、高校生地域みらい留学、この3つの政策を掛け合わせたようなことをトライアルでしている。これは、私学なので各県の教育委員会ではなく、私学振興課が所管で若干変わるが、大学の附属高校を全国とエンゲージさせることで、東京にある附属高校と地域の附属高校、それで大学のOBに助けてもらう、そんな仕組みを今構築しようとしている。色々なステークホルダーに話を丁寧にしないと、なかなか出来ないが世の中の色々なことを関連付けたら、それが生まれた。今そのようなことをしようとしているので、参考として出せるタイミングが出てくれば、話したい。なぜ私学にしたかということ、私学の方がスピード感があって早かったというのが実態である。私学の場合、学校法人の理事長がOKならば、そこで全て進むというスモールスタートでできる。

○原口委員

尚古集成館などが世界文化遺産に認定されたときに、古仁屋高の学生が白糖製糖工場の調査をプレゼンしたら一等賞になったことがあるので、古仁屋高校と大島の北と南で連携してそれに大学生が絡む。大学生も世界文化遺産の時に、若手会という鹿児島県内の大学生が連携して啓発に努めたということがあるので、大島北高と古仁屋高校が素晴ら

しい連携が出来たらいいと思う。

○服部委員

情報はとても重要で、コロナの情報ひとつを見ても、島根は非常に患者が少ない。奄美大島も南西諸島もかなり少ないが、共通することとして情報を出していない。「島根はこんなにコロナの患者が少ないから、安全ですよ、ぜひいらしてください」と誰も言わなくて、逆にどの地域でも最近は大いぶん緩くなったけれど、広島県には行かないようにとか奄美でも加計呂麻島に調査に行くと言ったら、「いや今は来るな」と言われたりする。加計呂麻島、与路島に至っては、瀬戸内町の中でも文化財の調査に行くと言ったら、それも「来ないでくれ」という、そういう背景がある中で、外から奄美に行く人間にとっては、島のコロナの情報は非常に興味があるし、発信されていればいいと思う。実は地元の人はそんなに出不さないでくれと思っている人が多いのではないかな。情報は難しいと思いつつながら議論を聞いていた。

○田中完大島支庁長

古仁屋高校は、県や瀬戸内町も色々サポートしている。離島留学を受け入れるにあたっては、最初の面談から色々な調整をして地元に着するのを頑張っている。地元の長が相当本腰を入れてやらないと、教育委員会などが非常に多岐にわたった総合調整をしないといけない。また、喜界高校でも離島留学を始めようとしていて、ベースにあるのは喜界島サンゴ礁科学研究所である。サンゴ礁科学研究所が毎年サマーキャンプをしている関係もあり、今、大分から喜界高校に2人今来ており、喜界町が寮を整備しようとしている。そこで1つ学ぶことは、離島留学を受け入れるのは、高校にとってはプラスだが、地域の支援、喜界島だったら喜界島の珊瑚礁をアピールして、それを魅力として学校の授業プラス地元のサンゴ礁科学研究所と連携して、そういう学ぶ場を提供している。単に、入学者数が少ないから離島留学をするのではなく、喜界だったら珊瑚など、それぞれの島の地域資源を上手く地元の企業とか研究所などと連携して、この島に来て高校で勉強しませんかということの方が大事と思う。

○本田委員

地元側としてこの提案を受け誰がやるのか、現状では取組が難しいなら何らかのアクションをしないといけないと思っている。では、それをどこがやるのか、多分広域事務組合になると思うが、全部広域事務組合でやってくれではなくて、一旦受け止める場所がないと放りっぱなしになると思う。何らかの検討の場を作ってほしい。

○信島事務局長

市町村にも共有し、取り組めるものは取り組んで行くという流れになる。私共で、奄美群島成長戦略を作っており、10年の期間を終える。来年からの次期成長戦略策定の中な

どで活用させてほしい。

○曾根委員

ハワイの COVID-19 のサイトでは、ハワイ州感染状況データなど受入に向けた情報発信をしている。デジタル化戦略の 1 つとなるので、こうした公表も必要と思う。

3. その他

○勝委員

今後のスケジュールが知りたい。

○事務局 国土交通省

予算が確定していないので、なかなか言いづらい。

4. 閉会

○事務局 九州経済研究所

以上をもって閉会する。

以上